『多くの者たちが主を信じない理由』 '20/08/30

聖書個所：マルコの福音書 2 章 18-22 節（新約 p.67-）

イエス・キリストが多くの病を癒され…、また、それと同時に、多くの者たちに福音のメッセージ…、つまりは、救いのメッセージを伝えてくださっていたにも関わらず、当時、それを邪魔する者たちがおりました。それが、所謂、律法学者たちであり…、あるいは、パリサイ人たちでありました。彼らは元々、神のみことばである（旧約）聖書に通じ…、民衆たちに、そのみことばを教えるべき存在でありました。

命題：パリサイ人たちは、なぜ、イエスを信じようとしなかったのでしょう？

しかし、聖書全体を見てみますと、その当時のパリサイ人たちが悪意を持って、イエス様に臨んでいる姿を見て取ることができます。では、一体どうして、彼らはイエス様に対抗し、その働きを邪魔するようなことになってしまっていたのでしょう？…今回のみことばは、そういったことを、私たちに教えてくれています。つまり…、パリサイ人たちが、なぜ、救い主であるイエス様のことを受け入れられなかったか？イエス様を信じようとしなかったか？…その理由について、であります。

それと同時に…、私たちは、当時のパリサイ人たちだけでなく…、私たち、すべての人間が、イエス様のことを信じようとしない理由についても見ていくことができます。…と言うのも、この当時のパリサイ人たちが持っていた罪や問題点というものは、彼らだけのものではなく…、すべての人類にも共通するものだからです。どうぞ、今日のみことばである、マルコ 2:18 以降をお開きください。

Ⅰ・ 中身 ではなく、形式的なもので満足してしまっていたから（18-20 節）

まず、ここの個所で、私たちが1番に確認をしていきたいことは、私たち人間が、“中身”ではなく、形式的なものだけで満足してしまう傾向にある、ということです。実際、この当時のパリサイ人たちが、そうでした。彼らは宗教的な行ないに満足し…、そのことをもって、イエス様の一行を非難しました。彼らからすると、宗教的行ないこそが重要であり…、その本質などには、あまり関心が無かったのです。まずは、そのことを確認していくために、マルコ 2:18-20 をお読みしたいと思います。

18 ヨハネの弟子たちとパリサイ人たちは断食をしていた。そして、イエスのもとに来て言った。「ヨハネの弟子たちやパリサイ人の弟子たちは断食するのに、あなたの弟子たちはなぜ断食しないのですか。」
19 イエスは彼らに言われた。「花婿が自分たちといっしょにいる間、花婿につき添う友だちが断食できるでしょうか。花婿といっしょにいる時は、断食できないのです。
20 しかし、花婿が彼らから取り去られる時が来ます。その日には断食します。

●パリサイ人たちの質問とは？

今回のみことばは、イエス様に対する質問で始まっています。その質問をしたのは、18 節にありますように、『ヨハネの弟子たちとパリサイ人たち…』であります。…どうやら、彼らは、イエス様に対する“悪意”から、こんな質問をしたようです、「私たち…、バプテスマのヨハネの弟子たちやパリサイ人たちは、よく断食をしています。それなのに、なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか？」って…。

さて、皆さんは、覚えてくださっていますでしょうか？以前、イエス様の語ってくださった、「山上の説教」と呼ばれているメッセージから、「断食」について学んだことがありました。マタイ 6:16-18 の個所になります。そこで学んだことなのですが、この当時、普通のパリサイ人たちは、1週間に2度、断食をしておりました。ですから、例えば、ルカ 18 章に出てくる「パリサイ人と取税人の祈り」に出てくるパリサイ人も、その祈りの中で、『私は週に二度断食し…』（ルカ 18:12）という風に祈っていましたでしょ？

しかし、旧約聖書のみことばを見てみますと…、そこで、具体的に、断食と言うか…、それに近いことが勧められているのは、実は、年に1度の、「贖罪の日[1]（＝贖いの日）」だけ[2]でありました。…にも関わらず、この当時のパリサイ人たちは、1週間に2度も、断食をしていたのです。…その理由を、皆さんは覚えてくださっていますでしょうか？⇒イエス様が、「山上の説教」で、そういったことを非難しておられます。…と言いますのも、実は、その当時のパリサイ人たちは、断食をすることによって、自分たちが、より霊的で、信仰深い！ということを見せつけたかったのです。言わば、偽善です。つまり、パリサイ人たちは、自分たちのことを、信仰深く見せつけるために、断食というものを利用していたのです。

そんなパリサイ人たちでしたから、彼らの断食には、非常に分かりやすい特徴がありました。実は、この当時、週の内、月曜日と木曜日とに市場が開かれていて…、その月曜日と木曜日とには、大勢の人たちが買い物のために集まってくる傾向があったのですが…、パリサイ人たちは、その月曜と木曜に断食をしていたのです。…と言いますのも、それらの曜日に断食をすることが、1番、大勢の人たちの目に触れることができたので、自分たちの断食をアピールするのに、1番効果的であったからです。だから、彼らは、聖書のみことばが教えているわけでもないのに…、わざわざ、週に2度も…、しかも、1番目立つ曜日に、断食をしていたわけです。

そこに、この当時のパリサイ人たちの、もう1つの間違い…、問題点があります。前回言いましたように、彼らパリサイ人たちは、聖書のみことばだけではなく…、そこに、自分たちの思い込みや、自分たちの考えたルールや習慣を付け加えては、そういったことを教え…、また、そういったことをもって、多くのことを判断していたのです。だから、彼らは、イエス様に質問したのです、「一体、どうして、あなたがたは断食しないのですか？」って…。しかし、それは、聖書のみことばから来ているのではなく…、ただ、パリサイ人たちが考えたルールにしか過ぎません。イエス様たちは、聖書のみことばに何も反しておりませんでした。ただ、この当時のパリサイ人たちのルールや習慣に反していただけだったのです…。

●イエス様が預言された内容とは？

そんなパリサイ人たちからの質問（＝非難）に対して、イエス様は、次のようにお答えになられました…。それが、19-20 節に書かれてある内容です。『19 …花婿が自分たちといっしょにいる間、花婿につき添う友だちが断食できるでしょうか。花婿といっしょにいる時は、断食できないのです。 20 しかし、花婿が彼らから取り去られる時が来ます。その日には断食します。』⇒ここでイエス様がおっしゃられたことは、非常に預言的な内容で…、多分、現代の私たちが、イエス様の、このお答えを聞いても、すぐにはピンと来ないでしょう…。

しかし、改めて言うまでもなく…、この当時の者たちには、このイエス様のお答えが理解できたのです。…実は、この当時の習慣として、例え、断食中であっても、結婚の祝宴など、その出席者たちは断食をしないでも良かったのです。だから、イエス様は、ここで、祝宴の例えを用いられたのだと思われます。

実は、イエス様は、ここで、パリサイ人たちの非難に対して、見事な返答をしておられます。…と言いますのも、①まず、先程言いましたように、この当時は、祝宴の最中なら、断食をしないで済んだこと。②2つ目に、イエス様は、ご自分が、その花婿であるという例えを使うことによって…、ご自分こそが、誰しもが待ち望んでいた“約束の救い主”である、ということをお話しくださっています。③そうして、3つ目に、ご自分が、やがては、取り去られる時が来て…、その時に、大勢の者たちが悲しむであろうこと。すなわち、イエス様が十字架上で磔にされるということを、ここで暗示しておられるのです。

---

[1] レビ記 16:29、『あなたがたは身を戒めなければならない…』⇒断食を含む。その他、レビ記 23:27-28、25:9 も。
[2] 当時、公認？の断食日は、①贖罪の日、②プリムの前日、③エルサレム陥落を記念するアブの第 9 日だけ。

何も、イエス様は、断食という行ない、すべてを全否定しておられるのではありません。実際、イエス様だって、ご自分が公生涯に入られた時、断食をしておられます。だから、ここ 20 節でも、イエス様は、『…しかし、花婿が彼らから取り去られる時が来ます。その日には断食します。』とおっしゃって…、弟子たちも、いずれ、然るべき時が来たら断食をするであろう、ということをおっしゃっておられます。

●そもそも、断食とは、何のために行なうのでしょう？

じゃあ、今度、私たちが考えたいことは、そもそも、断食とは、一体、何なのであろう？何のために、私たち信仰者は断食を行なうのだろうか？という根本的な質問です。実は、聖書では、断食について教えられてあるみことばを見つけることは、比較的簡単にできます。例えば、ある人物が、特定の時期、特定の理由で、断食をしたことや、断食を命じている部分などがそうです…。しかし、聖書全体を見て、断食について、一般的な教えというか、“基本的な原則”を教えているような部分は、ほとんどありません。旧約と新約の両方を見ても、実際に、神が断食を“命じておられる”みことばは、1ヵ所だけだろうと思います。それが、先程話した、『贖罪の日』（レビ記 23:27-28；25:9）という、たった1日だけなのです。この時以外で、神が民たちに対して断食を求めたことは、多分、私の知る限りありません。しかも、新約聖書では断食に関する“命令”は、一切無いはずなのです。

もしできましたら、どうぞ、レビ記をご覧ください。レビ記 16:29 に、こう書かれてあります、『以下のことはあなたがたに、永遠のおきてとなる。第七の月の十日には、あなたがたは身を戒めなければならない。この国に生まれた者も、あなたがたの中の在留異国人も、どんな仕事もしてはならない。』とあります。実は、レビ記 23:27 でも、同じようなことが命じられています。しかし、これらだけなのです、みことばが、はっきりと断食を命じているのは…。これらの個所で、「身を戒める」と訳されている言葉（ענה）を、ヘブル語の辞書で調べてみると、「この世的な欲望（＝食欲など）を抑制することによって、自らをへりくだらせる…（あるいは、）悔い改めなどを表わすために、自らが加える内なる痛み…」というような説明がありました。

皆さん、分かってくださいます？つまり、断食とは、それをすること自体が目的なのではなく…、そのように食物などを絶つことによって…、しっかりと、自らを戒める（＝自らを注意したり、自分の行動を抑制したり、自分の罪や欲が自由気ままに振舞わないように、警戒する）ということでもあるのです。

また、新聖書辞典では、断食について、このように説明してくれていました、「断食は、それに伴う肉体的苦痛を通して、深い罪の自覚と恐れをもって神に近づく者の熱心な祈りと悔改めを表現しているのである。」と…。つまりね、皆さん…。断食とは、神への熱心な祈りと、悔い改めの結果であり…、“証し”なのです。断食のための断食と言うか、断食をすること自体が目的なのではなく…、何か、神様への熱心な祈りの課題があったり…、あるいは、自分の罪を悔い改めたりする中で…、自然と、断食という行為が出てくるわけなのです。

それは、例えば、こういう場合です。例えば、皆さんの大切な方が大きなケガをしたり…、亡くなりそうになっていたりして、そのことだけを熱心に祈っている時に、食事の時間などを気にされます？何か、切羽詰ったことについて、熱心に祈っていてですよ、その最中に、「あっ、12時だから、ちょっとランチに行こう…」とは、ならないじゃないですか？…そうでしょ？

ある牧師は、断食に関して、こうコメントしました、「断食をせずに祈ることはできるでしょう。しかし、祈りなしで聖書的な断食を行うことはできません。断食とは、激しい祈りの証明であり…、神の前にある、深い葛藤の必然的結果なのです。これは決して単独で行なわれる行為でも、儀式や慣習的行事でもありません。断食自体には、何の効果も価値もないのです。もし、神のみこころを知り、従っていくこと以外の理由で、断食が行なわれるならば、それは無価値であるだけでなく…、霊的障害であり、罪となるのです。」って…。

以上のことから分かるのは、断食自体は、もちろん、罪ではありません。しかし、断食のための断食と言うか…、断食すること自体が目的になってしまうと、残念ながら、それは聖書の教えではありません…。パリサイ人たちも、かつては、神の前に正しいことを主張していたのだろうと思います…。しかし、それが、いつの間にか、表面的で、外見ばかりを取り繕うようなことばかりに、気が向いて行ってしまったのです…。断食とは、本来、何か重大な祈りの課題があったり…、自分の罪を激しく悔い改めるような時、神に祈る時に、自然となされるようなものなのであって…、断食そのものに、深い意味や目的はありません。しかし、この当時のパリサイ人たちは、断食という、宗教的な行ないをすることによって…、自分たちが、さも信仰深い…、自分たちが正しいことをしている…、と思い込んでしまっていたのです。

このように、私たち人間は、時々思い違いをしてしまうことがあります。物事の中身や本質を突き詰めることなく…、その表面的なものだけで、勝手に勘違いをして、満足してしまうのです。…皆さん、覚えてくださっています？例えば、あのマルタとマリヤの例です。あの時、マルタは初め、イエス様に喜ばれようとして、一生懸命、おもてなしをしました…。しかし、妹のマリヤばかりが、イエス様の話に聞き入ってしまって…、自分ばかりが忙しく、おもてなしをしてしまって、とうとう、イエス様に、「イエス様！妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのですか！」と言って、怒ってしまいます。

このように、私たちクリスチャンも、1番大切な心や動機といったものを吟味することなく…、ただ、礼拝に参加しているからとか…、ちゃんと献金しているからとか…、奉仕にも参加しているからというような…、ただ、上っ面だけを適当に取り繕ってしまって、「だから、自分は、このままで良いのだ！」というような思い違いをしてしまっていることが有り得ます。

もしも、そうなら…、私たちも、この当時のパリサイ人たちと何ら変わりありません。イエス様は、見せかけだけの信仰的な行ないをしていた、パリサイ人たちのことを、「偽善である！（＝うわべだけを取り繕っているにしか過ぎない）」というように、厳しく非難されました。時々、イエス様が言われた、『偽善者』（マタイ 6:2）という言葉（ὑποκριτής）は、「偽善者（の他に）、仮面芝居の俳優、役者、演技者…」とも訳され得る言葉です。…と言うのも、『偽善者』とは、自分のことを偽って…、本当の自分ではない、誰か別の人物を「演じる人」のことだからです。言わば、行ないでもって嘘をついている、と言えるのです。

ですから、どうぞ、皆さん、考えてみてください…。皆さんの中に偽善はないでしょうか？偽りの自分、見せかけだけの自分を取り繕ってしまってはいないでしょうか？⇒もしも、そうなら…、神は、そのことをすべて御存じです。この当時、イエス様が、パリサイ人たちのことを厳しく非難されたように…、神は、偽善者のことを厳しく非難されます。そこに、神様の与えてくださるような平安や感謝はありません。ですから、どうぞ、1日も早く、自分の罪を悔い改めて…、神の前に、正しく歩んでいく者となってください。

Ⅱ・それまでの考えや習慣に、継ぎをしようとしていたから（21-22 節）

次に、今回のみことばが教えてくれているのは、パリサイ人たちが、せっかく新しいことを聞いても、彼らは、ただ単に、それまでの考えや習慣に、単なる“継ぎ”をして、済ませようとしていたからです。だから、彼らは、イエス様の教えてくださっていた、本当の救いについて理解できなかったのです。彼らに必要であったのは、彼らの抱えていた問題に、継ぎ切れを当てることではなく…、彼らの持っていた考えを、根本的に（＝根こそぎ）、変えてしまうことであったのです。どうぞ、今回のみことばの 21-22 節をご覧ください。

21 だれも、真新しい布切れで古い着物の継ぎをするようなことはしません。そんなことをすれば、新しい継ぎ切れは古い着物を引き裂き、破れはもっとひどくなります。

22 また、だれも新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、ぶどう酒は皮袋を張り裂き、ぶどう酒も皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるのです。」

●古い着物に、新しい着物から継ぎをすることの愚かさ

まず、ここで、イエス様は、パリサイ人たちに大切なことを教えるに当たって、1つの例え話をされます。それは、誰も、古い着物が破れたような時に、わざわざ、新しい着物の方を破いてまで、継ぎを作って、その新しい着物で作った継ぎを、古い着物の破れたところには当てないでしょ、ということです。確かに、その通りです。そんなことをすれば、せっかくの、新しい着物が台無しになってしまうばかりか…、そこまでして古い着物に新しい着物の継ぎ切れを当てても合うはずがない、と言うのです。

確かに、そのことは分かります。しかし、イエス様は、ここで、何のことを教えようとしてくださっているのでしょう？⇒実は、みことばの中には何度か、イエス様の教えが、それまでのものとは違う、『新しい教え』（マルコ 1:27 など）、あるいは、『新しい契約』（ルカ 22:20）、であるということが教えられています。皆さんも覚えてくださっていると思いますが、イエス様は、最後の晩餐の時、弟子たちに向かって、『この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による“新しい契約”です。』（ルカ 22:20）と、教えてくださったじゃないですか。

イエス様が十字架上で流してくださった血による贖いは、それまでの、十戒による契約（＝シナイ契約[3]）に代わるものでありました。だから、私たちクリスチャンは、もう律法の上には居ないので、律法の細かい規定（安息日遵守や食べてはならないものなど）を守る必要はないのです。

みことばは、このキリストによって救われた者たちが皆、『新しく造られた者』であるということを教えてくれています。例えば、Ⅱコリント 5:17 がそうです、『だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。』と、みことばは教えてくれています。それまでの、何か不完全なものではなく…、完全な主権者であり、私たちの本当の造り主なる神を信じた私たちは、自分の犯してきた罪やそれまでの生き方を悔い改めたが故に、全く新しい者へと作り変えられました。それは、私たち人間にはできないことで…、神が、そうしてくださったのです！

…にも関わらず、ある人たちは、私たちが信じ従うべき新しい生き方に、それまでの古い生き方やかつての考え方や習慣を持ち込もうとします。しかし、そんなことをすれば、私たちの新しい生き方はチグハグになってしまいます。ここで、イエス様は、そういったことについて教えてくださっているのです。

もう、イエス様の贖いによって、新しくされているのに、古い習慣や生き方を取り込もうとすることも…、あるいは、その逆で…、イエス様を信じる信仰によって、まだ新しくされていないにも関わらず、表面的な行ないや何か部分的なことだけをクリスチャンらしくしても…、それもまた、同じようなことです。そのどちらも、チグハグなことをしてしまっているが故に、いずれ、破綻して（＝行き詰って）しまいます。そのことを、ここで、イエス様は教えてくださっているのです。

特に、ここの例えで言われていますのは、古い着物に、新しい継ぎをするようなことです。つまり、クリスチャンになるまでの生き方や考え、また、価値観などを捨てることなく、そのままで…、そこに、みことばの教えを、ちょこちょこっと当てはめようとしたところで、それは、何の役にも立ちません。

ですから、もしも、その方が、みことばが教える信仰（＝救い）を持つことなく…、ただ、習慣だけをキリスト教的にしたところで、それには、何の意味もありません。大切なのは、信仰であって…、その人が、本当に、神様によって新しく造り変えられているかどうか？なのです。…そうでしょ？

●古い皮袋に新しいぶどう酒を入れることの問題点

ここで、イエス様は同じような、もう1つの例えを挙げてくださっています。それが、「新しいぶどう酒は、古い皮袋ではなく…、新しい皮袋に入れなければならない！」というものです。正直、私は、アルコールに関して、あまり詳しくないのですが、『ぶどう酒』は、ぶどうのしぼり汁を発酵させて造るわけですよね…。その際、新しいぶどう酒は発酵力が強いため、普通は、初め、壺や桶に入れられたのだそうです。そうして、1週間ほど経ってから、それが皮袋に移し替えられたのだそうですが、その場合、新しい皮袋に入れないと、新しいぶどう酒の発酵力のために、古い皮袋だと破れてしまうのだそうです。

ここでイエス様が話してくださった、両方の例えが教えてくれていることは、新しいものに古い何かでもって、対応しようとすることの愚かさです。新しいものには、それに合った新しいもので対応しないと、その両方ともがチグハグになってしまうという教訓です。

この時、パリサイ人たちは、取税人レビに始まって、イエス様とその一行のことを非難していましたが…、もう彼らは、自分たちと同じ古い契約の中には居ない、ということに気付かないといけなかったのです。ですから、イエス様はもちろんのこと、その弟子たちも…、取税人レビ（＝マタイ）も…、かつての律法を守るべき存在ではありませんでした。

そもそも、私たちに律法が与えられたのは、私たちが神の律法を完全には守り行ない得ないこと…、私たちには、神の与えてくださる救い主が必要であるということを分からせるためのものでした。実に、それこそが、旧約聖書にある数々の律法が、私たちに与えられた理由なのです。

ですから、皆さん、どうぞ、ガラテヤ書 3 章を開けてみてくださいます？ガラテヤ 3:8-11 で、パウロは、「神が、神を知らない異邦人たちのことを、その信仰によって義と認めてくださる」ということや、律法…、つまり、行ないによっては誰も義と認められる者など居ない！ということを教えてくれています。

いえ、それだけではありません。どうぞ、ガラテヤ 3:23-26 をご覧ください。『23 信仰が現れる以前には、私たちは律法の監督の下に置かれ、閉じ込められていましたが、それは、やがて示される信仰が得られるためでした。 24 こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。 25 しかし、信仰が現れた以上、私たちはもはや養育係の下にはいません。 26 あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。』

⇒このように、天の神様は、行ないとは別に、信仰による救いの方法を与えてくださいました。…と言うのは、私たち人間は誰一人、行ないによっては救われ得ないからです。しかし、クリスチャンたちの中に、かつての教えに惑わされて、律法の行ないに戻ろうとする者たちが出てきました。そういった者たちに警告するために、このガラテヤ書は書かれたのです。

＜励ましの言葉＞

この当時、間違った道に走ってしまっていたクリスチャンも、そして、この当時のパリサイ人たちも、同じような過ちを犯しておりました。…と言いますのは、彼らは、自分たち（の行ない）に価値がある！と思い込んでしまっていたことであります。良いですか、皆さん？天の神様は、宇宙を含む、この自然界を、たった1週間でお創りになられた、素晴らしい御方なのです。いえ…、天の神様は、そういった能力だけではありません。この御方は、愛や恵み、憐みや正義…、そういった道徳的な面におきましても、私たち人間には考えられないような、素晴らしい御方です。

果たして、私たち人間が、どれほど頑張ったところで、その神様から喜んでいただけるような立派な行動をすることができるでしょうか？…天の神様は、私たちを救うために、そのひとり子をさえ惜しまずに与えてくださったほど、愛や恵みに満ちた御方なのです！そうでしょ！…それに対して、私たち人間は？と言うと、すぐに、あのマルタ・マリヤの姉妹マルタのように、初めは良い動機で働いていても…、いつの間にか、グチをこぼしてしまっていたり…、自分を誇ってしまったり…、何か、別のいやしい動機が出てきてしまったりします。今日のみことばに出てきたパリサイ人たちだって、そうです。彼らは、ほんの少し、良いことをしているからと言って、すぐに、他人を見下して、人を裁いておりました…。悲しいことに、それが現実です。

しかし、あのイエス様は、私たちの罪を救うため、自ら進んで、忌まわしい…、あの十字架へとかか～

[3] 出エジプト記 19:3-9 を参照。神が、イスラエルの民と結んでくださった契約。⇔新しい契約。